

医療者と家庭を結ぶ

隔月刊 ドクターズプラザ

DRP

1月号

VOL.125 Jan 2015

DRP Information for Pure Life



特別インタビュー／岩本勉氏(野球解説者・スポーツコメンテーター)

ファンへ、周囲の人々へ、親への感謝

インタビュアー：内野美恵氏(東京家政大学ヒューマンライフ支援センター准教授)

連載

ドクターヘリ⑤／北海道・日本赤十字社 旭川赤十字病院

救急医療は病院の総合力のバロメーター

連載

企業最前線 ②⑩／ユニ・チャーム株式会社

「寝たきりゼロ」を目指す商品開発

連載

女子大生が考えた一品料理 レシピ ④①

「簡単! 鮭のせほうじ茶漬け」・「根菜の和風グラタン～みそしょうが風味～」

レシピ監修：東京家政大学ヒューマンライフ支援センター管理栄養士 太田 あゆみ

季節を読むことは体調管理にも役立つ!?

スタッフ採用のポイント、
「動物が、その人のことを好きかどうか」



プロフィール

東京農業大学を卒業後、(財)進化生物学研究所勤務を経て1984年沖縄に移住。2008年公益財団法人沖縄こどもの国飼育課長、2010年チルドレンズミュージアム館長を経て2012年より施設長。今帰仁村にて農場を経営、和牛の人工授精所を運営、琉球弧の在来家畜を飼育している。

動物たちと心通わせるという、独特の観察眼を持つプロフェッショナルがいるという噂を聞き、沖縄こどもの国(以下、沖縄こどもの国)を訪ねた。日射しに負けないパワフルな笑顔で迎えて下さったのは、施設長やスタッフと向き合う姿勢から、独特の情熱とタフさの源、哲学が感じられる。その視点やご自身の健康についてお話をうかがった。

動物も人もよく観察することが大事

——沖縄の人よりも沖縄に詳しいという印象を受けますが、ご出身は沖縄ではないとかがい驚きました(笑)。

高田 出身は東京です。沖縄に住むようになってからはもう31年目になります。住まいと農場が今帰仁(なきじみん)にあり、沖縄こどもの国のある沖縄市には、毎日通っています。だいたい片道1時間ちょっとかかりますね。

——沖縄との縁は?

高田 もともとは、農業をやりたいと思って東京農業大学を選びました。でも、大学というところは農業

学を学ぶところで私がやりたかった「農業を実践するところ」ではなかったんです。それで違うなあと思って、20歳の時に南米に渡りました。特に日本にこだわっていたわけではなかったのです。でも、紛争があったりして帰って来なくてはいけなくなりました。結局大学に戻りました。就職活動というものはせず、何がやりたいのか方向づけることが出来ないまま、かといって農家の知り合いもいなかったのを道を探して行きました。「人と違う環境に行きたい」という思いはあったので、最北か最南のどちらかに行こうと。それで南の沖縄を選びました。

——「沖縄こどもの国」は、動物園等もあるのですか。

高田 「動物園」「チルドレンセンター」「ワンダーミュージアム」の3つの施設から構成されています。

「動物園」には、哺乳類、鳥類、魚類、爬虫類など約150種類の動物がいます。それら多彩な動物達を身近に見ることで、生命の尊さやすばらしさを実感できる動物園です。

「沖縄市ふるさと園」は、沖縄の気候風土に適するように造られた明治末期から大正にかけての農家のたたずまいを復元したものです。

沖縄の古い屋敷構えは去る大戦で多くを焼失し、また生活様式の変化に伴いその姿は年々少なくなりつつあります。幸いにして、沖縄市に寄贈していただきました。

そこでこれらの貴重なものの移築を含め先人たちの文化遺産を再現すると共に、文化事業に施設を利用し、地域の風俗、習慣、歴史を学んでもらうことを目的に移設しました。

毎日、県内外のこども達、歳を召した方々、科学に興味を持った方々などで賑わっています。

——こどもの国の「施設長」とは、どのような役割なのでしょう?

高田 沖縄こどもの国の理念は「人を作り・環境を作り・沖縄の未来を作る」。私の役割は、スタッフみんなの先頭に立つ「親」のような役割だと考えています。と言っても色んなタイプの「親」がありますし、その時に必要とされる「親」の要素も違うと思います。私の場合は「スタッフを認めてあげる」タイプかな。それぞれを観察して「この人は、こんなことが得意なんだ」と見つけて認め

てあげたいと思っています。

——動物だけでなく「人」への関心度も高いのですか?

高田 そうかもしれません。動物も人も、よく観察することは大事です。「言葉(ことだま)」と言われますが、やっぱり言葉は伝える手段のひとつだと思っています。どうにでも飾れる。動物も、あと小さな子も、言葉は話せません。言葉ではない方法で「読む・読み合う」ことが必要です。私の「相手を読む力」が磨かれたのは、きっと、昔から気が小さくてよく観察していたからだと思っています。

——言葉が使えないというのは、ちょっと難しそうですが、この仕事に向いている人の条件というのがありますか?

高田 実は、スタッフを採用する時には「動物に見てもらおう」ようにしています。どんなに学校で専門的に学んでいても、また「私は動物が大好きです!」と言っても、大切なことは「動物が、その人のことを好きかどうか」だから。

——「好きこそ、もの上手なれ」ではないのですか? 面接するのは、どんな動物なのでしょう?

高田 そうですね、片想いだけでは難しい。何と言いますか……。「動物に選ばれた人」という感じですが、これは、教育で身に付けられるものではなくて、ある種のセンスのようなものかもしれません。でも、その人が一緒に仕事をするのは人間ではなくて動物ですから、やっぱりそれはとても大事。ある動物園では、新人は、もし失敗しても大丈夫な小動物から担当させるという話も聞くのですが、ここでは、違います。ウマ

やゾウについてももらいます。ウマやゾウという動物は、とても人を読んでいる。「動物を、読めるか。動物が、その人をどう読むか」が、そこで見えてくる。動物は不思議ですよ。噛まれちゃう人は、いつまでたっても噛まれる。ウマでも、手綱を握る人によって動きが違います。努力しても、変わらないのですか？

高田 そうですね、変わらないと思います。教えられるものでもないし。だから、最初にそれで見極めることは大事ではないかと。でないと、動物たちも含めてお互いに幸せになれませんから。小さな変化や兆しに気づくことができないと、この仕事の場合は「動物を殺してしまうこと」にもなりかねません。ペットのように1〜2匹なら、いつもじつと見ていれば分かります。でも、100頭といった多くの動物を見る場合は、そうはいかない。掃除をしながら両側にいる動物の感じを何となくとらえて「アレ？」と気付けるかどうか。そんなセンスが必要です。

ストレスは、「心地の良いもの」。
乗り越える快感も！

——一日のスケジュールについて、教えて下さい。

高田 私は、沖縄子どもの国の施設長とは別に、農業生産法人有限会社「今帰仁アグリー」の代表も務めています。和牛飼育や人工授精所のほか、遺伝資源・文化資源の保存と地域資源の活用を目的に琉球弧の在来豚を400頭、在来牛を12頭、在来山羊を7頭、在来馬2頭を飼育し、在来米、在来蔬菜等も栽培しています。朝は6時30分に起きて、7時から今帰仁の農場でスタッフとのミーティングを行います。それから沖縄こど

もの国に向かい、9時から18時までの業務です。夕方に、今帰仁の農場から状況報告のメールが届いているので、19時30分くらいに今帰仁に着いたら、それをもとに和牛、在来牛の人工授精を行います。その後は、原稿の執筆、講演や学会発表の準備などをこなしたりします。

休日は？

高田 沖縄こどもの国には、もちろん休みもあります。でも私は、あまり「いわゆる休日」という概念はないような気がします。仕事・休みというのではなく「生きていることへの充実感」こそが、私が求めているもののような気がするのです。

——食事や運動で何か気をつけていることはありますか？

高田 それが、特に浮かばないのですが……。困りましたね(笑)。食べる物は、エネルギーとタンパク質、ミネラルとビタミンをなんとなく考えます。動物のエサを連想してですが(笑)。

——睡眠時間は、どのくらいですか？

高田 だいたい6〜7時間くらいはとっています。朝が起きられないとか、2度寝するといったことはまったくありません。「疲れた」と思うことはありませんが、そんな時には「眠る！」。

——高田さんは「タフな人」という印象なのですが、ストレス対処法などはどうされているのですか？

高田 ストレス……。私にとってストレスは、実は「心地いいもの」なんです。人生は修行だ！と思っているのです。ストレスを乗り越える快感もあって、好きなことをやっている時には、プレッシャーへの開き直りの強さがあります。逃げることは、ないですね。「逃げなかった」というのが、自分の満足感にもつながりますから。向き合うことで、対処されているのです。その強さは、どこからくるのでしょうか？

高田 もともと弱さ・気の小ささがあるからだと思います。気が小さいからこそ、ポジティブと言われる思考が強くなったのではと。根拠はなくても、どこかでいつも「必ず道は開ける！」と信じているような気がします。それは、大学時代の恩師である故・近藤典生先生(財団法人進化生物学研究所 初代理事長)の弟子であるということも、大きな支えになっています。

——これまでに、病気になったことは？

高田 25歳くらいで「腺熱 glandular fever」にかかりました。熱が40度以上出て動けなくなつて、最初は風邪だと診断されたのですが、どうも改善されないで紹介された病院へ行くと即入院と言われ、3週間入院していました。その時、医師から治りが早いと驚かれました。病室では、南米での色々な体験談を話したところみんなが笑ってくれて、不思議と病室全体が元気になっていきました。

——動物たちの健康のために気をつけていることはありますか？

高田 これは、小さい子どもでも同じなのですが、動物は言葉で伝えられないので「よく観察する」ことが大事です。

——動物と仲良くなるためのアドバイスはありますか？

高田 センスは別として、ですが(笑)。まずは、攻撃しない(吠えない・噛みつかない)ものから慣れていくのが良いと思います。こちらの恐怖心は、動物にも伝わりますから。動物は苦手という方は、ヒヨコのような攻撃しない「かわいい」と思える動物から慣れていくのがオススです。相手が動物でも人でも「こちらの感情がオープンである」とこと、コミュニケーションを積み重ねていくことが大事だと思います。読者へ一言お願いします。

高田 私の場合は、「やりたいことを、やる」という軸から外れないというのを基本にしています。そうしたら、どんなことも「大変だ」とは感じない。あと、行き詰ったら別のこと(方法・ジャンル)について考えるようにしています。長くそこにとどまらず一度離れてみると、頭と心のスイッチの切り替えになると思います。

それから、旧暦を意識することで健康のヒントが見つかるかもしれません。季節を読むことは、体調管理にも役立ちます。人の身体も季節のリズムと連動していますから。最新の科学に基づいた運動や栄養なども有効だとは思いますが、古くからの行事や風習に、実は理にかなったものがちゃんと入っているのです。この時期に、これをお供えて、みんなで食べるようになっていくといった風に、その時に必要な栄養がちゃんと摂れるようになっていくことが分かります。みんな自然に行っていたことの中に「いのちを守るすべ」がちゃんとあって、学問は後からついてきたものなのだと感じます。筋力を鍛えるということとは別に、「自然・土地のリズムに逆らわない」ということも大切ではないでしょうか。



出産をひかえたヒツジと一緒に